様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００６４９

研究課題名（和文）中国典籍日本古写本研究の精密化と国際的情報発信

研究課題名（英文）A Detailed Study of the Japanese Old Manuscripts of Chinese Books in Order to Promote International Dissemination of the Information.

研究代表者
道坂　昭廣（MICHISAKA, AKIHIRO）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：２０２０９７９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究期間中、所蔵諸機関に赴き、国宝重要文化財を中心に約50点の中国典籍古写本を調査した。その情報はすべて古写本データベースに反映させた。また各所蔵機関の目録等を精査し、中国典籍古写本をリスト化した。このことにより、日本に所蔵される古写本を網羅したデータベースを作成した。本科研のもう一つの大きな目的であった、中国典籍古写本に関する情報発信については『敦煌写本研究年報』は毎年、newsletterも4回刊行した。学会等での報告は、メンバーが積極的に国内外の学会で参加したほか、最終年度は「第六届漢文写本研究学術論壇暨中国典籍日本写本文献研究」学会を天津師範大学と共催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本に伝わる中国典籍の古写本の重要性は、近年国内外の学会で注目されるようになった。本研究はそれらの典籍を実際に調査し正確な書誌情報を作成し、それらを含む古写本データベースを作成した。中国古典研究に対して重要は書誌的情報を提供するものである。
　国内外の学会における報告とともに、『敦煌写本研究年報』とnewsletterの刊行は、これら中国典籍日本古写本の学術的価値について報告また考察したものである。これらは前者は既に国際的に高く評価されおり、後者もその記事が中国語に翻訳され刊行されていることから明らかなように、国内外の注目に応え、日本古写本の書誌的、学術的価値を発信する研究となった。

研究成果の概要（英文）：During the period of this study, we visited each holding institution and surveyed approximately 50 old manuscripts of Chinese classics, mainly national treasures and important cultural properties. All of this information was reflected in the old manuscript database. In addition, the catalogs and other information of each holding institution were carefully examined to compile a list of Chinese classic manuscripts. This has resulted in the creation of a database that covers all old manuscripts held in Japan. As for the dissemination of information on Chinese classic manuscripts, another major objective of this project, the "Annual Report on the Study of Dunhuang Manuscripts" was published annually, and newsletters four times. In addition, in the final year of the project, we co-hosted the "Sixth Annual Conference on the Study of Manuscripts in Chinese Classics and Manuscripts in Japan" with Tianjin Normal University.

研究分野：中国文学

キーワード：中国典籍　古写本　書誌学　敦煌写本　写本学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国典籍が書写された日本古写本の重要性は、中国学研究者の共通認識となりつつある。しかし同様な意義を持つ敦煌吐魯番写本研究と較べて、研究の基盤となる書誌情報や国内外の研究成果の共有は、未だ不十分であった。

中国典籍日本古写本に対する書誌学的関心は、狩谷棭齋等江戸末期の書誌学者に始まる。しかし実質的には明治以降、大名公家、神社仏閣に秘蔵されてきた古写本古刻本が世に出ることによって始まった。当初は書跡としての関心も強かったが、敦煌写本の発見とともに中国典籍として価値が注目されるようになった。英仏両国をはじめとして世界に散在し、その後の国際情勢もあって総合的な調査に大きな困難をともなった敦煌吐魯番写本に対し、日本古写本は比較的まとまって保存されている。ところが近年、前者の総合的な所在目録や書誌情報が整備されつつあるのに対し、日本古写本について専門にそれを網羅した目録は未だにない。厳紹璗『日蔵漢籍善本書録』（中華書局 2007 年）には古写本も含まれるが、その書誌情報の記録には統一性なく、また掲載されていないものもある。中国学研究の観点から日本古写本について、筆写時期、形態、伝承、紙背文書、奥書・識語や断簡の有無など、必要な情報を完備した目録の作成が、必要とされていた。

佚書佚文の貴重さは言うまでも無いが、宋版元版を源とする中国現存典籍に対して、日本古写本は多くが隋唐写本の古態を伝えており、この点でも中国学研究者の注目を集めつつある。またこれまで『文選』『白氏文集』など個別典籍では、国内伝存テキストの系統に関して精密な調査が行われているものもある。ただ未だに書写時期や基づいたテキストについて、見解が分かれる古写本も残る。書写時期が未確定であることは、日本古写本を利用した研究の進展を妨げる重大な問題である。これを確定するためには、実際に熟覧することはもちろんであるが、更に近年の敦煌吐魯番写本のテキスト研究の成果を援用することが可能ではないだろうか。地域を異にするものの、重なる時期をもつ両写本を比較し検討することは、今日においてこそ可能となった方法であり、またそのことによって従来別々に調査が進められてきた両地域の古写本研究を補完発展させる大きな可能性を持つ。

明治時代から大正時代にかけて、博物局や印刷局といった公的機関の調査、その後古書店、骨董店などのオークションを通して、日本古写本の発見が相次いた。前者は当時最新の技術でそれらを景印した。また森立之・楊守敬、内藤湖南・羅振玉らの古写本古刻本に対する調査と研究によって、佚文の紹介や現行テキストとの校勘が行われた。この時期を日本古写本研究の第一期とするなら、敦煌吐魯番写本の整理がほぼ完成し、比較資料として使用が可能となった現在、日本古写本研究は新しい段階に入りつつある。この状況は国内に止まらない。中国では域外漢籍研究所（南京大学）や国際漢学家研修基地（北京大学）といった研究機関が設置され、国際的視野を持った中国学研究が推進されつつある。日本古写本はこれらの研究に大きく貢献する資料群であり、これまでの研究を整理し、国内の研究者ばかりでなく、国外の中国学研究者も意識した、詳細で正確な研究基盤を構築し公開することは、日本の中国学界が果たすべき重要な課題である。

日本に伝わる中国典籍の古写本研究の進展を妨げる障害は以下の 4 点に集約される。第 1 に、日本古写本を記録するうえで、スタンダードとなる記載法がまだないこと。第 2 に、中国典籍日本古写本を網羅したデータベースがないこと。第 3 に、テキスト系統をできる限り明らかにし、日本古写本の価値を正確に測定した情報が不足していること。第 4 に、明治から大正年間の日本古写本発見期の日中両国の研究が整理総括されていないことである。今後の研究のためにはこれらの障害を取り除くことが急がれていた。

２．研究の目的

本研究の目的は、国内外の中国学研究者に中国典籍古写本の最新かつ信頼できる情報を提供することである。その為、まず海外流失写本を含め、現時点で所在が明かである中国典籍日本古写本のすべてを網羅した、精密なデータベースを作成する。このデータベースは、写本として必要な書誌的情報を搭載するものとし、そのことによってまた、日本古写本目録のスタンダードを提示する。書写時期やテキストの系統を解明することは、日本古写本が中国学研究の資料として利用される際の基盤となるものである。。次に先行研究を検討など従来の研究手法に加え、最近の敦煌吐魯番写本の研究成果を利用し、日本古写本をテキストとして価値を明らかにし、国内外に発信する。具体的には、

第１、いわば一点物である古写本のデータベースは、筆写時期、形態、伝承、紙背文書、奥書・識語や断簡の有無など、刊本・排印本と異なる書誌情報が必要である。本データベースは古写本としての特別な情報を加えた日本古写本書誌のスタンダードとなるものを作成する。

第２、特に敦煌吐魯番写本との比較により、テキスト系統をできる限り明らかにし、日本古写本の価値を測定する。

第３、明治から大正年間を日本古写本発見期と捉え、日中両国のこれら典籍の研究を統合整理し、中国学における日本古写本研究史として提示する。

これらのことによって国内外の中国学研究者の研究推進に寄与する。

３．研究の方法

本研究は高田時雄を研究代表とする「中国典籍日本古写本の研究」(基盤研究(A)　平成 25 年から 29 年・以降「高田科研」と称する）の課題を継承する点がある。

まず高田科研の成果の一つである「中国典籍日本古写本データベース（暫定版）」（http://www.zinbun.kyoto-.ac.jp/~takata/Kaken/takatadb)」について、ブラッシュアップを行い完成させる必要がある。特に、WEB 上での検索の利便性の向上を目的として、データベースコンテンツの充実と掲載項目を再検討し、ページデザインを確定する。並行して中国典籍古写本の所蔵機関へ調査に赴く。また諸目録より古写本のデータを拾い出し整理する。このため「データベース」の内容は、アップデートする必要がある。一方で古写本の価値の測定については、敦煌吐魯番写本の研究成果を取りいれ、書写時期など日本古写本において未確定の情報について検討する。本研究の参加者は高田時雄をはじめ敦煌吐魯番写本の研究を行っている研究者が多く、研究の蓄積がある。これらの最新の情報は、直ちにデータベースに反映させるとともに、『newsletter』を定期的に刊行することによって根拠を提示し、最新の情報を発信することとする。これらの活動のため、科研参加者による検討会を随時開催し、情報の共有と調査分担などの計画を作成する。またより広い知見を得るため、余欣（浙江大学)、童嶺・卞東波（ともに南京大学域外漢籍研究所)、劉玉才（北京大学)、また中国に所在する日本古写本の調査研究を行っている王暁平（天津師範大学）らの協力を仰ぎ、意見交換を行う。

次に、中国典籍日本古写本の価値の発信を目的の一つとする本科研では、その手段として、以下の 3 つの方法をとる。①ニューズレターの発行。主に調査によって得られた知見、書誌的情報や写本としての特色について紹介する。これはデータベースの情報を補足するとともに、記載情報の根拠を提示することも目的としている。②『敦煌写本研究年報』の刊行の継続。本『年報』は、高田科研の研究報告媒体としての役割を担っていた。既に 12 号まで刊行されており、国内外の学界で高い評価を得ている。本科研においても、メンバーを中心に日本古写本に関する研究報告会を開催し、その発表を基礎とした論考を本『年報』に掲載する。③国内外の学会参加。本科研メンバーには高田時雄、高橋智と国内外にその研究がよく知られている研究者を含む。彼らを中心に積極的に国内・国外の学会に参加し発表する。

第 3 に、19 世紀末から 20 世紀前半における日中の研究者の日本古写本に関する研究と、公私の関連機関における古写本調査及び景印活動についての情報収集を行う。本科研は、中国学において、日本古写本研究史を構築しようとする。この面での研究の基礎となる情報の収集と整理を行う。特にこの時期の研究者のうち、中国では楊守敬・羅振玉、日本では内藤湖南の調査の中心とし、彼らの典籍研究を具体的に調査する。また東京・京都の国立博物館をはじめとする公的機関、東洋文庫（岩崎文庫）などの所蔵機関の古写本収蔵の経緯について調査を行う。この調査は、古写本調査とともに、古写本の附属情報として所蔵の経緯や景印履歴の有無、景印の方法について調査し、景印を行った人物・機関の情報の整理作業を兼ねる。更に日本古写本の発見が相次いだ、明治から大正時期を対象に、楊守敬『日本訪書志』の記述とともに、（ア）古書店やオークションの目録。（イ）景印の記録。（ウ）日本古写本そのものや景印本の末尾に記されていることが多い跋文等の筆記を収集整理し、この時期の日本古写本に対する関心と研究を整理する。この作業によって得られた成果の一部はデータベースに取り込むことが可能である。また日本古写本発見時期の様相を総合的に明らかにする。

４．研究成果

新型コロナウィルスの流行は本研究が目的とする古写本調査や情報発信に大きな障害となった。しかし流行の間隙を縫って、研究期間中、科研メンバー全員で、或いは個人で、国会図書館、東洋文庫、足利学校、金沢文庫、国立歴史民俗博物館、関西大学図書館（内藤文庫)、台湾故宮博物館図書文献処などで中国典籍日本古写本の調査を行うことができた。これらの調査によって得られた書誌データはすべて中国典籍日本古写本データベースに反映させた。また実際に調査に赴くことが極めて困難であった時期を中心に、公私の諸機関の漢籍収蔵目録、『国宝大事典』などから 3000 点を超える日本伝存中国典籍古写本の情報を収集整理した。

また研究期間中『敦煌写本研究年報』を毎年 1 冊計 5 回、『newsletter』を計 4 回発行し、研究成果及び調査情報として発信した。国内外の学会は多くが中止となったが、その後 Zoom 等の WEB 形式で開催されることがふえ、科研メンバーがそれぞれ学会に参加し成果の報告を行った。科研最終年には「第六届漢文写本研究学術論壇暨中国典籍日本古写本文献研究」学会を天津師範大学文学院と共催し、科研メンバー3 名が基調報告を行うとともに、中国側の科研テーマ「漢文写本研究」を主催する王暁平教授らと情報交換を行った。

なお研究期間中の班員の論文は 48 件、学会発表 33 件、図書 3 件であった。すべて各年次報告記載の通りである。

また『newsletter』第 1 号から第 8 号掲載の論考報告は、すべて中国語に翻訳され『国際中国文学研究叢刊』（上海古籍出版社）第 10 号から第 12 号に掲載された。本科研が掲げた「国際的情報発信」は、新型コロナウィルス流行という予期せぬ事態に見舞われたものの、所期の目的を

一定程度達成したと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計35件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　7件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 道坂　昭廣	４．巻 8
２．論文標題 關於正倉院王勃詩序的“發見”	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際中国文学研究叢刊	６．最初と最後の頁 56 66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 道坂　昭廣	４．巻 21
２．論文標題 《王勃集》佚文中的女性墓誌與出土墓誌ー王勃作品流行的痕迹	５．発行年 2021年
３．雑誌名 國際漢學研究通訊	６．最初と最後の頁 65　84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 道坂　昭廣	４．巻 15
２．論文標題 王勃《陸録事墓誌》の斷簡について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 敦煌寫本研究年報	６．最初と最後の頁 35　50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高田　時雄	４．巻 21
２．論文標題 京都大學所藏《永樂大典》的流傳	５．発行年 2020年
３．雑誌名 國際漢學研究通訊	６．最初と最後の頁 206－218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 高田　時雄	4．巻 15
2．論文標題 再び白堅について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 敦煌寫本研究年報	6．最初と最後の頁 137-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋　智	4．巻 1
2．論文標題 日本の漢籍文化	5．発行年 2021年
3．雑誌名 岩崎文庫の名品―叡智と美の輝き	6．最初と最後の頁 86－89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 玄　幸子	4．巻 53
2．論文標題 石濵文庫収蔵書簡に見る仏英調査旅行関連資料について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東西学術研究所紀要	6．最初と最後の頁 117－128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 玄　幸子	4．巻 24
2．論文標題 中国口語史研究と敦煌文献	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関西大学　外国語学部紀要	6．最初と最後の頁 37－49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 道坂　昭廣	4．巻 664
2．論文標題 『王勃集』佚文中の女性の墓誌と出土墓誌―王勃作品流行の痕跡	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館文学	6．最初と最後の頁 168－182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 道坂　昭廣	4．巻 5
2．論文標題 羅振玉旧蔵『王子安集注』と『王子安集佚文』稿本	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中国典籍日本古写本の研究　Newsletter	6．最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 玄幸子	4．巻 59
2．論文標題 内藤湖南との交流に見る石濵純太郎	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東西学術研究と文化交渉　石濵純太郎没後五〇年記念国際シンポジウム論文集	6．最初と最後の頁 223-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋　智	4．巻 5
2．論文標題 名古屋市　蓬左文庫所蔵　寫本『論語』2種について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中国典籍日本古写本の研究　Newsletter	6．最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高田　時雄	4．巻 6
2．論文標題 敦煌遺書に見る西天取經の事蹟	5．発行年 2020年
3．雑誌名 續中國周邊地域における非典籍出土資料の研究	6．最初と最後の頁 89-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高田　時雄	4．巻 3
2．論文標題 京都大學綜合博物館所藏敦煌遺書簡介	5．発行年 2019年
3．雑誌名 佛教文獻研究	6．最初と最後の頁 23－38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安岡孝一	4．巻 1
2．論文標題 Universal Dependenciesの拡張にもとづく古典中国語(漢文)の直接構成鎖解析の試み	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人文科学とコンピュータ	6．最初と最後の頁 1－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安岡孝一	4．巻 94
2．論文標題 漢文の形態素解析・依存文法解析・直接構成鎖解析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東方學報	6．最初と最後の頁 330-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 道坂昭廣	4．巻 16
2．論文標題 羅振玉より徳富蘇峰への手紙―同志社大学図書館蔵『羅振玉書簡：徳富猪一郎宛』略注（下）―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化論講座	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 道坂昭廣	4．巻 13
2．論文標題 正倉院藏《王勃詩序》校注（上）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 敦煌寫本研究年報	6．最初と最後の頁 263-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安岡孝一	4．巻 18
2．論文標題 古典中国語(漢文)の依存文法解析と直接構成素解析	5．発行年 2018年
3．雑誌名 漢字文献情報処理研究	6．最初と最後の頁 56-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安岡孝一	4．巻 -
2．論文標題 Universal Dependenciesにもとづく古典中国語(漢文)の依存文法解析	5．発行年 2018年
3．雑誌名 センター研究年報2018	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　2件／うち国際学会　19件）

1．発表者名 高田　時雄
2．発表標題 羅振玉と日本敦煌學の創始――特に羅振玉と藤田豐八の交遊について
3．学会等名 2020年度關西大學東西學術研究所第7回研究例會「羅振玉の學術と學術への新しいアプローチ」
4．発表年 2021年

1．発表者名 道坂　昭廣
2．発表標題 王勃為女性所作墓誌與出土墓誌　－ 對於唐代文學基盤的一個推測 －
3．学会等名 駢文國際學術研討會及第六屆中國駢文學會年會（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 道坂昭廣
2．発表標題 関於『万葉集』題詞的漢文
3．学会等名 中国古代散文国際学術研討会暨第十二届中国古代散文学会年会（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 道坂昭廣
2．発表標題 関於正倉院蔵『王勃詩序』抄写文字―以中国諸版本差異為中心―
3．学会等名 全球化時代的中国文学文献研究　第四届漢文写本研究学術論壇（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 道坂昭廣
２．発表標題 関於《王勃集》的編纂時期―以日本保存的《王勃集》卷三十王承烈佚文為根拠―
３．学会等名 中国詩学研究新視野国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 玄幸子
２．発表標題 内藤湖南との交流に見る石濵純太郎
３．学会等名 東西学術研究と文化交渉―石濵純太郎没後50年記念国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 玄幸子
２．発表標題 日本對俗體字的接受與應用ー以年齡代稱與算賀為例
３．学会等名 21世紀漢字漢語漢文化國際學術研討會（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安岡孝一
２．発表標題 漢文の依存文法解析と返り点の関係について
３．学会等名 日本漢字学会第1回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 安岡孝一
２．発表標題 デジタル図書館としての東アジア人文情報学研究センター
３．学会等名 KU-ORCAS「(東)アジア研究×図書館×デジタルヒューマニティーズ」(
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 玄幸子	４．発行年 2020年
２．出版社 関西大学出版	５．総ページ数 196
３．書名 続　中国周辺地域における非典籍出土資料の研究	

１．著者名 高田時雄	４．発行年 2018年
２．出版社 近代中國的學術與蔵書	５．総ページ数 405
３．書名 中華書局	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	玄　幸子 (GEN YUKIKO) (00282963)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	安岡　孝一 (YASUOKA KOUICHI) (20230211)	京都大学・人文科学研究所・教授 (14301)	
研究分担者	高田　時雄 (TAKATA TOKIO) (60150249)	公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員 (72622)	
研究分担者	高橋　智 (TAKAHASHI SATOSHI) (80216720)	慶應義塾大学・文学部（三田）・教授 (32612)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関